

自然生活体験事業の教育効果に関する研究（Ⅱ）

清 國 祐 二

Yuji KIYOKUNI

A Study on the Educational Effects of 'Frontier Adventure Project'

〔キーワード：自然生活体験、学生カウンセラー、子ども観、教育観〕

はじめに

本研究は、出雲市教育委員会主催の社会教育事業である「出雲わくわくウォーク」¹⁾を題材として、本事業が学生カウンセラー²⁾に及ぼす教育効果を測定することを目的としている。

これまでの調査研究で、自然生活体験事業（フロンティア・アドベンチャー事業：以下FA事業と略記）が学生カウンセラーに及ぼす教育効果の全体像が明らかとなった³⁾。具体的には、FA事業への主体的参加が「厳しい自己評価と積極的な態度を涵養し、「自己の向上・変革への視点」をもたらせることにつながった。その態度は、まわりに働きかけることを通して自分の課題を発見し、それを分析し、その解決の方向を探ろうとする学習態度として現れた。他の社会教育事業への参加の動機づけ、獲得した経験や成果を実際の生活や学習にいかそうとする態度などもその現れといえる。

過去のデータから以上のような成果を得たが、詳細を示す個々のデータを得るには至っていない。そこで、本調査では「子ども観」及び「教育観」に焦点をあて、その認識変容についての分析を試みた。

1. 調査結果の分析

1. 学生カウンセラーのプロフィール

調査対象は、平成6年度と7年度に本事業に参加した学生カウンセラー20名である。彼らはすべて島根大学教育学部小学校教員養成課程に所属しており、学年および性別は、平成6年度が3回生3名、2回生6名、1回生1名、男性3名、女性7名、平成7年度が3回生4名、2回生6名、男性3名、女性7名となっている。学生の教員志望の状況は表1の通りである。本学部が教員養成を主要な目的とすることから、教員になることを希望す

る学生が大半であることは予想通りの結果である。それを学校種別にみると所属課程を反映して、全員が小学校を希望している。

また、彼らの本事業への参加経験を尋ねたところ、8名は参加経験があり、残りの12名は初めての参加であった。

	是非なりたい	できればなりたい	わからない	なりたくない	合計
男性	5	0	0	1	5
女性	10	2	2	0	14
合計	15	2	2	1	20

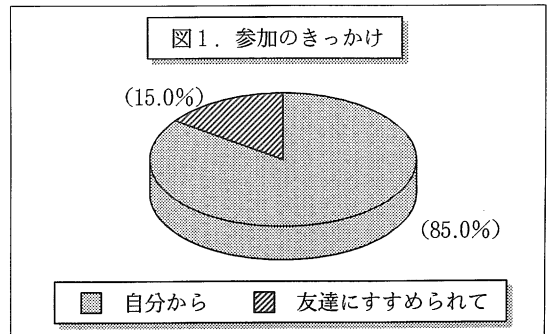
表1 事業参加学生の教員志望の状況

	1回生	2回生	3回生	合計
昨年参加した	0	3	5	8
今年初めて参加する	1	9	2	12
合計	1	12	7	20

表2 「出雲わくわくウォーク」参加経験

2. 参加のきっかけ

本事業への参加に際しては、85%の学生が「自分から」と回答しており、彼らの積極的な態度が窺える。これには、参加者数における経験者数の比率が比較的高いこと、本事業の効果が学生の中に浸透していることなどが影響していると考えられる。

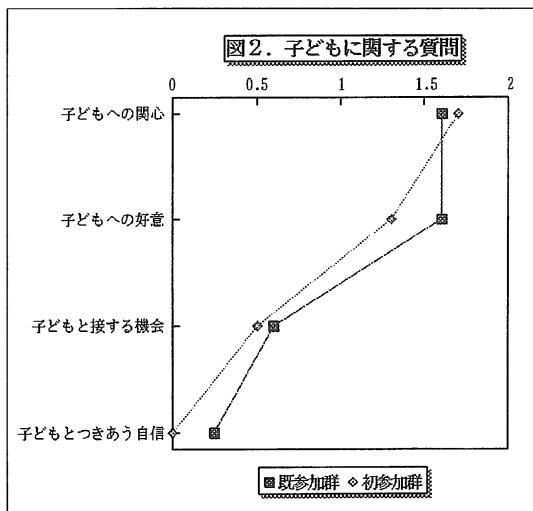


3. 子どもに関する質問

事業に対する期待と不安を測定するために、「子ども」に関する質問を行った。図2から、「子どもへの関心」や「子どもへの好意」がかなり高いことがわかる。それに対して、「子どもと接する機会」や「子どもとつきあう自信」はいずれも低いことがわかる¹⁾。教員養成学部に入る学生の特性を考慮し判断すると、基本的には「子どもそのものが好きであり、子どもとつきあうことが楽しいと感じる」けれども、実際には「子どもと接する機会は限定されており、うまくつきあう自信はもっていない」といえるのではなからうか。

これを「既参加群」と「初参加群」とに分け、比較してみた。両者に統計的な有意差はなかったものの、ある程度の傾向は読みとれよう。まず、「初参加群」の「関心」と「好意」の平均値には差がみられるが、「既参加群」にはそれがみられない。「好意」は子どもたちと接して成功体験をもつことで湧くものであることを考えると、「既参加群」は経験からそれがある程度得られており、両者が統合されているととらえられよう。

子どもと接する機会は両者ともある程度の経験を有しているが、子どもとつきあう自信は「既参加群」と「初参加群」とでは差異がみられる。「既参加群」は昨年の参加経験から多様な子どもの状況を認識したうえで、全体としてはやや自信があると回答しているが、「初参加群」はやや自信がないという回答である。「既参加群」の学生の中には、事前調査の自由記述の中で「昨年やり残したことをやりたい。」と書いているものもあり、回答の解釈の仕方としては自信というよりはむしろ自分の課題を達成しようとする事業前の緊張感(精神的高揚)の現れともとれるのではなからうか。



4. 「子ども観」の変容

学生カウンセラーが本事業に参加して得られた子ども観とはどのようなものであろうか。事後調査において平均値2以上の項目を使ってそれを表すと、「とても元気で、動的な存在であり、好奇心が強く、個性的であり、面白く、人間味にあふれ、感受性が強い」という子ども像が浮かんでくる。事前調査の「とても元気で、好奇心が強く、面白く、感受性が強い」子ども像と比較すると、事業参加を通して幅広く子どもを捉えられるようになったことがわかる。

それでは、本事業の参加前と参加後で学生の「子ども観」はどのように変化したのであろうか。「厳しい—優しい」($p < 0.05$)、「人間味がある—人間味がない」($p < 0.01$)、「責任感が強い—無責任である」($p < 0.01$)、「個性的である—画一的である」($p < 0.001$)の4項目で有意差がみられた。これらは、8泊9日という長期にわたる事業を通して、班のリーダーを任せられ、子どもたちと四六時中接することで形成された子ども観といえるのではなからうか。

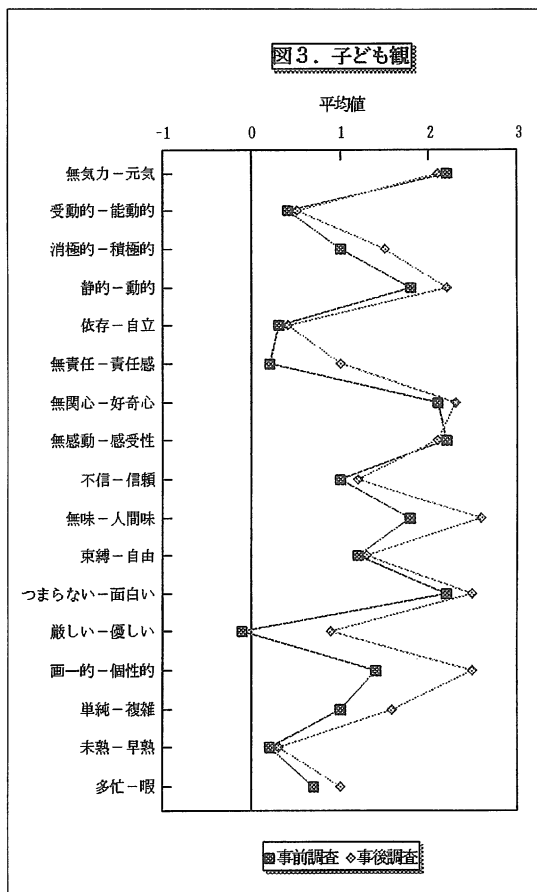
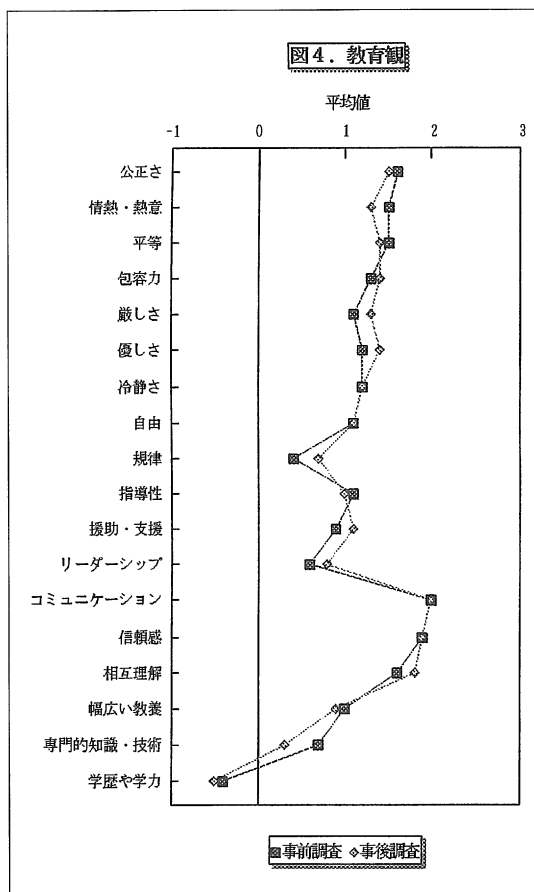


図3からもわかるように、その他の項目もわずかながら肯定的な見方に変わってきている。総合的にみても、本事業が子ども観の形成に大きな影響を与えていると言っ
て過言ではなからう。

5. 「教育観」の変容

「教育観」に関してはどうか。図4のように事業の参加前後における教育観の間には有意差はみられなかった。また、事前調査における既参加群と初参加群との間の有意差も確認されなかった。ここで項目としてあげたような「教育観」に本事業は影響を与えにくいという結果が得られた。



この結果を説明するために3つの仮説を立ててみた。第一に、これらの項目は既に学生自身の成長過程における学校教育体験の中で重要性や必要性が理解されており、本事業で新たな知見を得るほどのものではないということ。第二に、大学で受ける講義等（教職に関する科目が中心となろうが）における内容、すなわち大学で教授された教育観とほぼ合致した体験を積んだに過ぎなかった

ということ。第三に、教育観などはある程度の時間を経過してから構成されるため、事業終了直後に実施した調査ではその影響が現れにかったこと。これらの要因がどのように影響しているのか、あるいは一般的に教育観はいつごろ、何を通して、どのように形成され、確立されていくのかを、面接調査等の方法を用いてさらに詳細な分析が必要となる。

ところで、ここで教育観としてあげた項目は、次のような観点から4群に分類できる。第1群は子どもに対するときの基本的な態度、第2群はリーダーシップ、第3群は子どもとの内面的なつながり、第4群は知識・技術である。図4および表3からわかるように、第3群が最も重視される一方で、第4群が最低の平均値となっている。第2群のリーダーシップが低く押さえられているのも特徴であろう。

群	項目	平均値
第1群	公正さ 情熱・熱意 平等 包容力 厳しさ 優しさ 冷静さ	1.31
第2群	指導性 援助・支援 リーダーシップ	0.93
第3群	コミュニケーション 信頼感 相互理解	1.87
第4群	幅広い教養 専門的知識・技術 学歴や学力	0.22

表3 教育観の類型別平均値

6. 子どもと接する機会

学生が子どもと接する機会（接した経験）を尋ねたところ、図5のような結果を得た。最も多い回答は「夏期研修⁹⁾」で20名、続いて「学童保育⁶⁾」が17名、「親戚の子どもとの交流」が13名、「近所の子どもの交流」が10名となっている。

これらの項目をみると、前者の2項目が現在の活動であり、後者の2項目がこれまでの経験である。現在の活

動に注目すると、学童保育等で継続的に子どもと接する機会を持っている学生を除いては、子どもと日常的に接する機会は少ないといえよう。

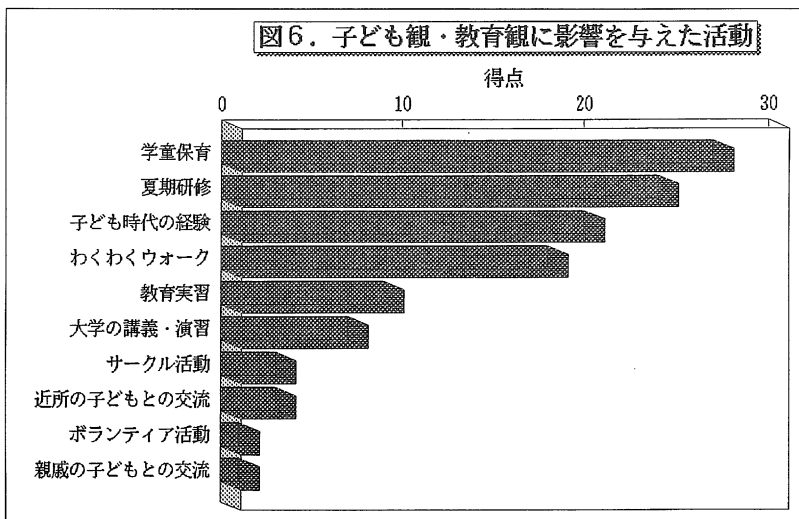
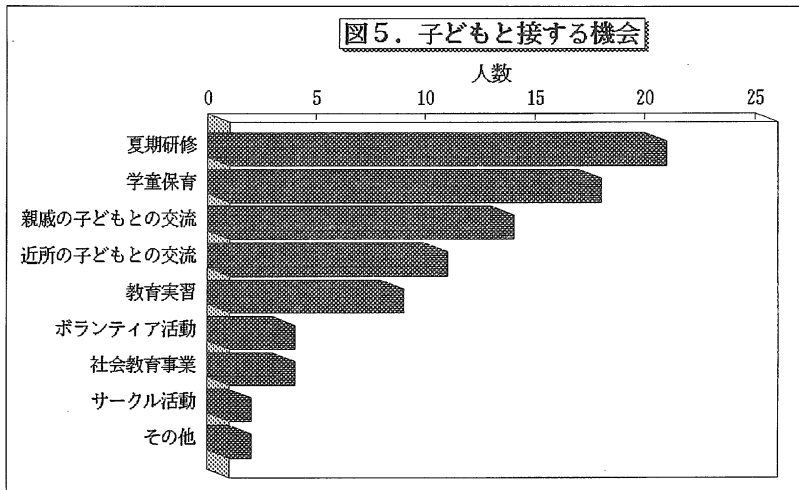
7. 子ども観や教育観の形成に影響を与えた活動

子ども観や教育観の形成に影響を与えた活動を3つまで選択し、さらにそれを順位づけしてもらった。それらを得点化して並べたものが図6のようになる(この得点とは、1位に3点、以下2点、1点を与え、それぞれ項目ごとに加えたものである)。

最も多かったものは「学童保育」の27点であり、続いて「夏期研修」が24点、「子ども時代の経験」が20点、「わくわくウォーク」(その他に含まれる)が18点となっている。

「教育実習」(9点)や「大学の講義・演習」(7点)もあげられているが、得点としては低く抑えられている。教育実習は3年生(特に後期)を対象とするものであり、その点ではハンディがあるが、いずれにしても大学のカリキュラムは他の活動に比べて子ども観や教育観の形成に及ぼす影響は少ないという結果となった。

それに対して、社会教育事業の得点の高さは見逃せない。学童保育は福祉の分野に入ろうが、活動内容はどちらかといえば社会教育的な要素を多くもつである。これまで大学は社会教育事業等の教育効果について特に取り上げてこなかったが、このような結果を真摯に受けとめるべきであろう。一定の成果が確認される社会教育事業への参加が大学単位化へと結びつけられてもいい時期にきているのではなからうか。



II. 教員養成の視点から

本研究の基本的視座は、社会教育事業がボランティアに及ぼす教育効果（事業参加を通しての獲得経験や態度変容等）を測定し、生涯学習とボランティアの関連性を明らかにすることにある。それは、事業によっては大学等の（高等）教育機関における単位認定への可能性をさぐる序論的研究でもある。

現在、内在および外在する諸要因による教員養成学部の改革・改組問題と連動して、教員養成のあり方の見直しが図られている。生徒数の減少からくる教員志望者数（教育学部学生数）と採用者数の需給関係の崩壊への対応が中心となりがちであるが、大学サイドとしてはこれを契機に積極的に教員養成の改革に取り組む必要がある。かつては、ある程度の学力と人間性を備えたいいわゆる優等生が教育学部へ入学し、大学として特に関心を払わずとも、採用試験に合格し、教員になってきた。ところが、最近では偏差値による進路決定や教員という職業の魅力の低下、学校に対する不信感の増大、子ども数の減少にともなう教員採用数の漸減等のさまざまな理由⁷⁾により、教員志望者数が減り、結果的に学生の学力や意欲の低下が指摘されている。さらに追い打ちをかけるように生活体験や自然体験の乏しい世代であり、個性的でありたいと願いながら、そうでない（と思いきや）自分に悩んでいる学生たちである⁸⁾。

そのような学生をどう育て、教員として送り出すかという問題は、単に知識教育・技術教育にとどまらない、学生の人格形成にまで大学が関心を払わなければならなくなってきたことを意味している。大学にそのような機能が備わっていないとすれば（大学が抱える機能ではないと考えることもできるが）、おのずとそのスタンスが変わってくる。今後ますます教員養成のあり方が問われる中で、それを社会教育の立場から問題提起していきたい。

翻って、教育学部の教員養成は「養成教育では優れた人間性、教育の専門者としての職業の倫理や論理を身につけるため、一般教育、教職教育、専門教育の三領域にわたる教育」を必要とし、その内面的統合が求められ、「教育者としての自己を形成する精神的支柱をいかに確立させるか」を中心的課題としている⁹⁾。しかし、養成教育における三領域は実践をともなわない基礎的・理論的学習が実態であり、それを経験によって実践力・教育活動として結実する必要がある。この経験をどう保障するかが問題となってくる。本研究の成果から、社会教育事業が子ども観や教育観に強く影響を与えたことが明ら

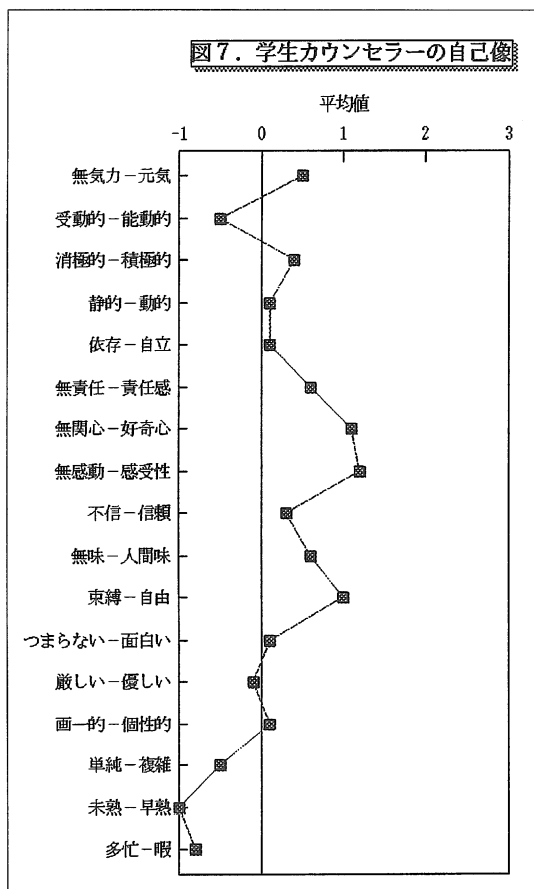
かとなり、学外へ目を向ける第一歩になればと期待する。

単位認定に際してはカリキュラム等との関係でより具体的問題を想定しなければならない。また、単位として認定するためにはそれが大学教育に相当する内容であることが必要条件となり、それには次のような観点から考察を必要とする。対象となる社会教育事業が大学の授業科目（実習を含む）の目的・内容・方法とどのように関連するのか、それを通して専門に関わるどのような知識、技術、態度が獲得されるのか、それは大学の教育内容にふさわしいものか、等の実証的研究がそれである。社会教育事業の成果の測定と単位認定への枠組みを提示することが今後の研究課題となってくる。

・注

- 1) 本事業は、昭和63年度から国庫補助の開始された「自然生活体験事業」のひとつである。これ以来、各自治体は無人島キャンプや人里離れた山奥のキャンプ、野営や河川下りをしながらの移動キャンプなどその地域の立地条件に合わせて事業を展開している。「出雲わくわくウォーク」は本年度で5年目を迎える。参考までに、要項を論文末に資料として載せておく。
- 2) 本事業の中では、班カウンセラーが正式の呼称である。例えば、平成5年度には学生以外に福祉施設職員が班カウンセラーとして参加しているのだが、ここでは研究のねらいを鮮明にするためにあえて学生カウンセラーと表記する。
- 3) 拙著「自然生活体験事業の教育効果に関する研究－学生カウンセラー調査を中心として－」中国四国教育学会編『教育学研究紀要』第39巻、第1部、pp.386-391。
- 4) 調査票は事後調査分のみを資料として載せておく。事前調査はそれから容易に判断できる。
- 5) 「夏期研修」とは、教育学研究室の学生が3回生および2回生を中心に自主的に取り組む活動である。近年はテーマを複式教育とし、5月ぐらいから自主ゼミ形式で学習会を行い、7月の夏休み開始時期に1泊2日で複式学校を訪問し、子どもたちとの交流の場をもちたり、研究授業を行ったり、ウォークラリー等で活動を共にしている。
- 6) 「学童保育」は、共働きの両親をもつ子どもを放課後あずかり、子どもたちの活動（遊びや勉強等）の支援をするものである。これも教育学研究室の学生が中心となってアルバイトとして、同時に子どもと接する機会を求めて関わっている。

- 7) 国立大学協会・教員養成制度特別委員会編『大学における教員養成』平成7年5月、pp.101-102.
- 8) 事前調査で子ども観と同じ項目で彼らの自己像を問うたところ、図7のような結果となった。図3の結果と比較すると起伏の少ないことがわかる。



- 9) 吉本二郎編『教師の資質・力量』(講座教師の力量形成1)ぎょうせい、1989年、pp.22.

学生カウンセラーの意識に関する調査<事後調査>

問1. 本事業において実際の子どもと接した後のあなたの「子ども観」についてお聞きします。それぞれの項目について、あなたが最も近いと思う番号に○をつけて下さい。

精神	純粋	純粋	純粋	純粋	純粋			
単純である	7	6	5	4	3	2	1	複雑である
元気がある	7	6	5	4	3	2	1	無気力である
信頼できる	7	6	5	4	3	2	1	信頼できない
自立的である	7	6	5	4	3	2	1	依存的である
優しい	7	6	5	4	3	2	1	優しい
能動的である	7	6	5	4	3	2	1	受動的である
人間味がある	7	6	5	4	3	2	1	人間味がない
責任感が強い	7	6	5	4	3	2	1	無責任である
個性的である	7	6	5	4	3	2	1	画一的である
積極的である	7	6	5	4	3	2	1	消極的である
自由である	7	6	5	4	3	2	1	束縛されている
好奇心が強い	7	6	5	4	3	2	1	無関心である
忙しい	7	6	5	4	3	2	1	暇である
動的である	7	6	5	4	3	2	1	静的である
面白い	7	6	5	4	3	2	1	つまらない
感受性が強い	7	6	5	4	3	2	1	無感動である
未熟である	7	6	5	4	3	2	1	早熟である

問2. 本事業終了後のあなたの「教育観」についてお聞きします。教育にとって次のような項目はどれほど重要だと思いますか。あなたが最も近いと思う番号に○をつけて下さい。

コミュニケーション	5	4	3	2	1
優しさ	5	4	3	2	1
指導性	5	4	3	2	1
自由	5	4	3	2	1
信頼感	5	4	3	2	1
情熱・熱意	5	4	3	2	1
専門的知識・技術	5	4	3	2	1
厳しさ	5	4	3	2	1
援助・支援	5	4	3	2	1
公正さ	5	4	3	2	1
相互理解	5	4	3	2	1
規律	5	4	3	2	1
幅広い教養	5	4	3	2	1
平等	5	4	3	2	1
リーダーシップ	5	4	3	2	1
包容力	5	4	3	2	1
学歴や学力	5	4	3	2	1
冷静さ	5	4	3	2	1

問3. 本事業終了後の「子ども」についてのあなたの考えをお聞きます。

- ① 子どもへの関心
 1. かなり関心がある 2. ある程度関心がある 3. どちらでもない
 4. あまり関心がない 5. 全く関心がない
- ② 子どもへの好意
 1. かなり好きである 2. ある程度好きである 3. どちらでもない
 4. あまり好きでない 5. 嫌いである
- ③ 子どもとつきあう自信
 1. かなり自信がある 2. ある程度自信がある 3. どちらでもない
 4. あまり自信がない 5. 全く自信がない

問4. あなたが普段子どもと接する機会、あるいは接した経験のある機会にはどのようなものがありますか。次の中から該当するものすべてに○をつけて下さい。

1. 夏期研修 2. 学童保育 3. 教育実習)
 4. 近所の子どもとの交流 5. 親戚の子どもとの交流)
 6. 本事業以外の社会教育事業 (具体的に:)
 7. サークル活動 (具体的に:)
 8. ボランティア活動 (具体的に:)
 9. その他 (具体的に:)

問5. あなたの子どもも親や教育者の形成に影響を与えたものは何ですか。次の中から該当するものを3つ選んで、その順番を回答して下さい。

1. 夏期研修 2. 学童保育 3. 教育実習 4. 近所の子どもとの交流
 5. 親戚の子どもとの交流 6. 本事業以外の社会教育事業
 7. サークル活動 8. ボランティア活動 9. 大学の講義・演習等)
 10. 自分の子ども時代の経験 11. その他 (具体的に:)

1 位	2 位	3 位

問6. あなた自身についてお聞きます。それぞれ該当する番号に○をつけて下さい。

- ① 性別 1. 男 2. 女
- ② 学年 1. 1年 2. 2年 3. 3年 4. 4年
- ③ 教師希望の有無
 1. 是非になりたい 2. できればならない 3. わからない
 4. なりたくない
- ④ 希望する学校種別
 1. 幼稚園 2. 小学校 3. 中学校 4. 高等学校
 5. 養護学校

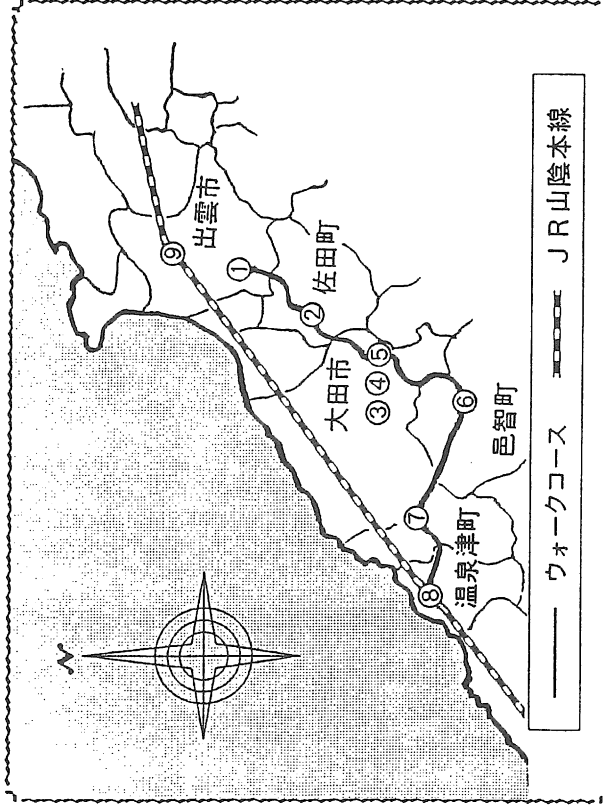
自由記述 : 本事業を終えての感想や、本調査に対する意見などありましたら自由にお書き下さい。

お疲れのところ、ご協力ありがとうございました。

出雲わくわくウォーク

山・川・海 110km

平成7年(1995)8月3日(木)～8月11日(金) 8泊9日の冒険



⑨ 8月11日(金)

移動	JRふれあい号
テーマ	友情の日 距離 4km

⑧ 8月10日(木)

宿泊	温泉津町総合体育館
テーマ	日本海 距離 16km

⑦ 8月9日(水)

宿泊	大森小学校体育館
テーマ	銀山物語 距離 25km

① 8月3日(木)

宿泊	乙立小学校体育館
テーマ	出会い 距離 4km

② 8月4日(金)

宿泊	窪田小学校体育館
テーマ	やすらぎの 距離 14km 水

③ 8月5日(土)

宿泊	三瓶北の原キャンプ場
テーマ	三瓶山へ 距離 17km

④ 8月6日(日)

宿泊	鱈池・芝生多目的広場
テーマ	森林浴 距離 9km

⑤ 8月7日(月)

宿泊	国立三瓶青年の家
テーマ	星の瞬き 距離 2km

⑥ 8月8日(火)

宿泊	邑智中学校光明寮
テーマ	川との戯れ 距離 19km